とちぎの「茶の湯」を考える
–粟宮宮内遺跡出土小壺底部片の検討–

篠原浩恵（しのはらひろえ）

はじめに
1．粟宮宮内遺跡の概要
2．粟宮宮内遺跡出土施釉陶器小壺底部小片
3．茶入出土の意味
4．粟宮宮内遺跡の「茶の湯」
結語

粟宮宮内遺跡出土の施釉陶器小壺底部小片を点茶法(抹茶)に用いる「茶入」と推定する。本資料出土の背景には、江戸時代後期の「茶の湯」の町人層への普及という文化史的側面があると考え、「町人の茶」の道具とみる。加えて、同遺跡内から出土する天目碗を「武家の茶」と捉え、「武家の茶」・「町人の茶」との相関関係の可否を考察する。

併せて、遺跡の地理的要因から「茶の湯」の場を振り返り、茶道具が出土する環境に「水」が関わる可能性を提示する。

はじめに

「茶」に関する日本最古の資料は『日本後紀』弘仁六(815)年四月二十二日条とされる。入唐僧永忠が嵯峨天皇に茶を献じた件りである。喫茶は遣唐使の廃止によって途絶えたとされるが、海上交通は盛んであり、断絶はなかったとする見方が強い。それは天台山を目指した円仁の帰国が新羅の商船であったと言われていることからも窺えよう。円仁は栃木県栃木市(旧岩舟町)や壬生町に出自・由縁を持つ、郷土の偉人である。円仁が著した『入唐求法巡礼行記』は、今日の喫茶文化の重要な資料となっている。しかし、栃木県における喫茶文化については、甚だ断片的である。無論、日本の喫茶文化自体も、現在の点茶法(抹茶)の作法の初源を捉えきれていないなど、不明瞭な現状がある。茶会記、往時の茶書(印刷物)、現在に受け継がれる茶道具・美術品はあるが、市井の状況は判然としない。市井の状況を明らかにし得る大きな手がかりは出土遺物である。しかし、本稿で紹介するような小片などは、茶道具の可否の判別は難しく、想定の域を出ない。確証がなく、また、微細片であり、報告されない破片の中には、遺跡の性格から茶器の可能性があるもの、あるいは、茶器の可能性があって、遺跡の性格に多様性を与えるものがあろう。資料を積み重ね、その可否を判断する材料とすることを目的とし、本遺物の資料紹介を行う。

1．粟宮宮内遺跡の概要

粟宮宮内遺跡は、小山市粟宮地内に所在する古代～近世を主体とする集落跡である。小山市街の南約3.5㎞、思川の東岸に位置する。国道４号の西側にあり、集落は現在に引き続いている。遺跡周辺の国道４号は江戸時代に整備された奥州街道・日光街道に沿う。また、遺跡の北約 600m に延喜式内安房神社が鎮座、北東４㎞超に祇園城がある。

遺跡の調査は、平成 19 ～ 28 年度・令和元年度にかけて、４次にわたり行われ、２冊の報告書が刊行されている(吉田 2011・篠原 2017)。本稿で紹介する施釉陶器底部小片は、平成 28 年度に行われた３次調査に伴い出土した遺物である。３次調査区は、時期の明確な遺構はなく、近世後半から近代初頭の遺物の出土が多い。本資料が後述のとおり、江戸時代後半の可能性を持つとすれば、遺物の出土状況に整合す

る。近世の粟宮宮内遺跡については、本報告において、日光街道の間々田宿と小山宿との間の街道沿いに形成された集落の一つとする成果が得られている(篠原 2017)。また、安房神社の門前との関わりも留意される。

２．粟宮宮内遺跡出土施釉陶器小壺底部小片

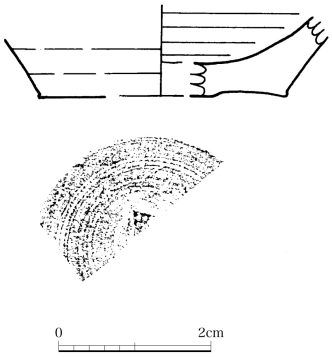
本資料は小壺とみられる底部小片で、茶入と推定する。発掘調査報告書(篠原 2017)には不掲載であるが、「第４章まとめ」において、茶入の可能性が指摘されている。遺構には伴わず、第 14 号溝状遺構(以下 SD-14)　に重複する撹乱穴から出土する。SD-14 は現在の国道４号に近い 3-D 区にある。3-D 区は、江戸時代の日光街道に推定される現在の４号国道に隣接する 1- １区[(1)]の西側に続く調査区である。1- １区・3-D 区とも、近世の建物遺構は確認されず、時期不明の井戸跡、時期・用途不明の土坑・小穴が複数基、調査されている。

本資料が出土した SD-14 からは、8 世紀後半とみられる須恵器有台壺(？)、銭貨「文久永宝」・「寛永通宝」、ガラス片等の 20 世紀の工業製品などが出土する。現地調査の所見はないが、近・現代のゴミ捨て穴である可能性があり、出土する遺物の本来の所在を推定することは難しい。あるいは　調査区外から齎された器物である可能性もあるが、3-D 区を含む調査区周辺であることは間違いないとみられる。

本資料は、ロクロ成形で、内面は明瞭な水引痕の上に褐色釉を施す。外面は回転ヘラナデで整形され、無釉である。底部は回転糸切りによって切り離される。底部中央部にはヘラを当てた際に生じたとみられる僅かな粘土の高まりが残る。底径の推定値は[4.0] ㎝。残存高は(1.3) ㎝。器厚は体部 0.3㎝前後、底部は中央部で 0.5㎝である。胎土は緻密で、微量の白色砂を含む。色調[(2)]は内面 7.5YR4/4 褐・外面 7.5YR5/4 にぶい褐・破面 7.5YR6/6 橙。大形の器種を想定することは合理的ではなかろう。

内面の底面外周付近は釉が薄く、素地が透けて見える部分が観察できる。6㎜ ×6㎜の範囲に径 2㎜ほどの不整な形状が斑らに集まった部分で、体部への立ち上がり部(第１図下から２本目の水引痕付近)の円周上に２箇所が並ぶ。本報告では皿状の器種も想定するが、口径の小さい袋状の器種の内面への施釉が十分でなかった結果と判断できる。

茶入の鑑賞ポイントの一つに、外面下位～底部の無釉の部分、



第１図　施釉陶器小壺底部実測図

参考　肩衝茶入（心明庵所有）

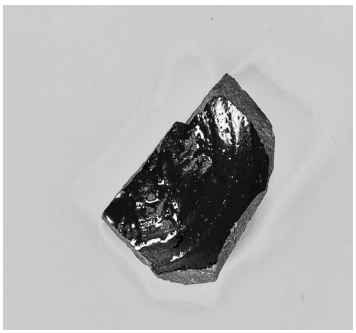


写真１　小壺底部小片
上左：内面　上右：底面
右：体部

「土みせ」と呼ばれる「裾」がある。本資料は、内面は施釉であるものの、外面は無釉であり、「裾」の想定が可能である。同様に、底部のヘラ切りは「輪糸切」と呼ばれる同心円上に輪を描く鑑賞ポイントになり得る。口径が小さく、小形、内面を施釉する袋状の器種と想定される点と併せて、茶入の条件を備える破片と言える。

本資料は、前述のとおり、遺構に伴わず、共伴する遺物もない。その年代については明らかにし得ないが、釉がガラス質化する点、破面が赤化する点などから、江戸期と考えられる。強いて推定するならば、後半期の可能性が高いであろう。産地は、胎土の質感からは美濃産とも見えるが判然としない。瀬戸・美濃産の範疇の可能性があろう。底部形状、産地の推定からは、肩衝の和物茶入と考えられる。

３．茶入出土の意味

茶入は点茶法(抹茶)で供する「濃茶」を入れる陶製の小壺であるが、古来より「茶の湯」の道具として用いられてきた。「茶の湯」とは「一服の濃茶を差し上げるために趣向をこらして客を招く」(田中 1993)ことであり、正式な茶会を「茶事(3)」と呼ぶ。小間の「わび茶」を旨とするもので、現在の「大寄せの茶会」とは趣を異にするものである。現存する「会記(4)」は、茶器として、「茶入」を記すものが多い。

本資料の推定時期である江戸時代には、「茶の湯」は男性を中心に行われてきた。女性は公家・大名家の家族、遊女など限られ、広く普及するのは、明治時代の「女礼式」によるとみられている。江戸時代後半になると世の中が安定し、富裕な町人層が台頭する。これに伴い、禁中・公家、武家によって担われてきた茶の湯は町人層に浸透し、急激な茶道(5)人口・地域の拡大を生む(利休百五十回忌　寛保元(1741)年以降)。この現象に対応し、七事式(6)などの「広間の茶」が茶の湯に取り込まれいく。

本資料が江戸時代後半の可能性が高いとすれば、茶の湯の拡大に伴う器物であろう。小間にしろ広間にしろ、茶の湯に稽古が伴うことは疑いないが、本資料が茶会用であるのか、稽古用であるのかは推定できない。所有者は裕福な数寄者と想定することが無難であろう。「宿」のように人が留まる場所ではない集落跡への茶の湯の普及を示す資料といえる。

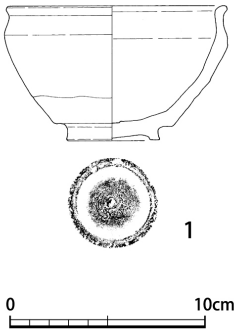
４．粟宮宮内遺跡の「茶の湯」

粟宮宮内遺跡の「茶の湯」を考える際、留意すべきは、調査区内から出土する天目碗である。５片が出土し、SE-77(7)出土破片は 16 世紀後葉～ 17 世紀前葉の美濃系、SE-209(8)出土破片は 17 世紀前半の瀬戸・美濃系、SK-104(9)・SD-364(10)・３次調査遺構外出土片は近世の国内産と推定されている。天目碗と本資料を繋ぐ時期の茶道具の出土は現状では確認されていない。本遺跡には、戦国時代末期～江戸時代初頭と江戸時代後半との２度の茶の湯の画期があったと考えておきたい。

天目碗は中国由来の格の高い茶道具で、16 世紀の茶会記に多くが記される。時期的に「武家の茶」の器物と言える。粟宮宮内遺跡と「武家の茶」を繋げるものは、中世の地方豪族から起った小山氏の居城である祇園城であろう。祇園城は、天正３(1575)年の落城に伴う小山氏の滅亡後、本多正純が入封し、元和５年(1619)年の宇都宮移封に伴い廃城となるが、SE-77・SE-209 出土の天目碗は本多正純の居城時期にあたる。17 世紀とみられる天目碗が出土した SE-209 のある調査区の北西は、祇園城周辺に続く「奥大道(11)」の推定ルートにあたることを鑑みれば「武家の茶」に関わる茶道具とみることは可能であろう。遺物の出土状況から、茶の湯の２度の画期を想定せざるを得ないが、「武家の茶」の素地があっての「町人の茶」であるのか、「武家の茶」と断絶した「町人の茶」であるのか、その相対関係の可否は興味深い。

更には歴史的事象に加え、地理的要因も鑑みる必要があろう。本資料・天目碗は建物跡の確認されない

遺構配置中にあるが、出土する調査区には、掘削の過程で滞水する井戸跡や、降雨等の保水によって水が浸み出す溝状遺構がある。調査区内には複数の井戸跡が確認されるが、同じ水脈を狙った可能性が指摘されている(篠原 2017)。調査区に近い安房神社の境内には「水神社」が祀られており、遺跡周辺が「水」に関わりあることが予見される。「水」は集落跡にとって不可避な条件であるが、茶の湯にとっても、喫茶という性質上、不可分な関係にある。複数の井戸跡や水神社は、必ずしも、水が豊かであるとか良質な水であるとかを示すものではなく、逆説的に、その希少性を現すとも考えられる。いずれにせよ、本資料の出土が、「水」という地理的環境を背景に存在し得た遺物である可能性を考えておきたい。



上：写真２　SE-77 出土天目碗
左：第２図　SE-77 出土天目碗
実測図

結語

本稿では、出土遺物を「茶の湯」の道具とみ、出土の背景を「茶の湯」の文化史的側面に求めた。令和２年度以降に続く発掘調査から、より詳細な遺跡の性格が明らかになれば、本資料を「茶入」とすることを見直すことが必要になることもあろう。しかし、「とちぎの喫茶」の詳細が明らかになることを期し、本資料のような想定の域を出ない小片であっても、資料が蓄積されることを願い、本稿を記す。

謝辞

本論を執筆するにあたって、簗博仙先生、池田敏宏・篠原祐一・篠原咲陽各氏より多くのご助言・ご指導を賜りました。また、作図にあたっては小林順子・根本弥幸各氏のご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。末筆ではありますが、御礼申し上げます。

［註］

註１　1 - 1 区は平成 19 年度に現地調査を行い、平成 23 年度に報告書が刊行されている(吉田 2011)。

註２　色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修 1996 年版)を参照した。

註３　「茶事」とは、「濃茶の味を最も美味しく味わってもらうために」、「ごく質素な亭主の手料理」(懐石など)や菓子などを出す茶会で、「客を限定し時間もたっぷりかける」。現在では、詳細な手順が決められている。亭主(招く側)は、茶会の目的に相応しい道具組で客を迎えるが、見識・知識・機智・機転を必要とするもので、「亭主の心入れに応える」ことのできる客を選ぶとされている。「小間」を重んじるため、客は数人程度の少人数となる(「」内は田中 1993 による)。

註４　「会記」とは、「茶会の日時・場所・道具立て・会席膳の献立などを記したもの。 茶会に参加した人名を記す場合もある。 特に、古い茶会記は文献資料として貴重。」(『コトバンク』)。「茶会記」。

註５　「茶道」とは、「茶の湯によって精神を修養し、礼法を極める道」(『デジタル大辞泉』)。江戸時代後半に町人層への「茶の湯」の普及に伴い、精神性や創意工夫が薄れ、「手習い」化することと画したものとされる。

註６　「七事式」とは、「八畳の広間で一度に５人以上の人数を対象として行われることを原則」(谷 2007)とする。現在

の「大寄せの茶会」とは異なる。

註７　SE-77 は２次調査Ⅲ - ３区に位置する（篠原 2017）。

註８　SE-209 は３次調査 A 区に位置する（篠原 2017）。

註９　SK-104 は２次調査 I 区に位置する（篠原 2017）。

註10　SD-364 は３次調査 B 区に位置する（篠原 2017）。

註11　奥大道とは、鎌倉から陸奥湾までを結ぶ中世の幹線道路である。栃木県域は鎌倉街道中道の推定ルートにあたる。粟宮宮内遺跡周辺での使用年代を 14 ～ 16 世紀とする推定がある。

［参考文献］

篠原浩恵 2017『粟宮宮内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 386 集　栃木県教育委員会・（公財）とちぎ未来づくり財団

田中仙翁 1993『茶道入門ハンドブック』三省堂

谷端昭夫 2007『よくわかる茶道の歴史』 淡交社

吉田　哲ほか 2011『千駄塚浅間遺跡・粟宮宮内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 336 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団